



## 東京2020の中東・北アフリカ

明治大学 教授 山岸 智子

### はじめに

「多様性と調和」をテーマに掲げた東京2020夏季オリンピック大会（以下、東京2020と略記）が8月8日に閉幕した。新型コロナウイルス感染症の拡大と開幕前からのトラブル続きで開催が危ぶまれた大会となったが、それにもかかわらず中東・北アフリカ諸国からの選手団や中東・北アフリカ出身者たち<sup>1</sup>が東京2020に参加してくれた。本稿は、その参加者たちのパフォーマンスを概観し、この地域のジェンダー問題とこの地域に関連するグローバルな人の移動に焦点をあてながら見てゆくことで、日本と中東・北アフリカの関係を考える一助としたい。

### 参加人数とパフォーマンス

さまざまな国内の困難と主催都市東京の諸問題にかかわらず、東京2020に参加した中東・アフリカ諸国選手団・難民選手団・独立参加選手団<sup>2</sup>の参加選手の人数と東京2020での獲得メダル数は表1のようになっている<sup>3</sup>。表1ではリオデジャネイロ2016夏季オリンピック大会（以下リオ2016と略記）と比較できるようにした。

最も大人数の選手団を派遣してきたのは、前回に引き続きエジプト（139名）、そして2番目にトルコ（107名）である。3番目は、リオ2016ではイランであったが、東京2020ではイスラエル（89名）である。

リオ2016に比べて10名以上東京2020への参加人数を増やしたのは、イスラエル、エジ

---

1 本稿では、日本国外務省が「中東・北アフリカ地域」とみなす20カ国（パレスチナを含む）を対象とし、国名の表記も外務省ウェブサイトの形式にしたがうこととする。また、人名について、アラビア語・ダリー語・トルコ語・ペルシア語の名前と思われるものについては岩波『イスラーム辞典』の転記方法を参考にカタカナ表記し東京2020の公式ウェブサイトに掲載されているラテン文字表記を付す。

2 クウェートのオリンピック委員会が資格停止処分を受けていたため、クウェート人選手はリオ2016には独立参加選手として参加した。その後クウェートの資格停止処分は解除され、東京2020ではロシア人選手が独立参加選手として参加したため、表1の当該セルには人数を記載していない。

3 選手数は試合の直前まで増減があるため情報が錯綜しやすい。本稿では、東京2020については8月30日時点でオリンピック公式ウェブサイトに「エントリー」として記載されている人数、リオ2016については、2017年に公式ウェブサイトからメモしたものをもとにしているが、その後リオ2016公式ウェブサイトが簡略化されたため、ウィキペディアをところどころ参照している。

プト、サウジアラビアだが、その理由としてはイスラエルでは男子野球、エジプトとサウジアラビアでは男子サッカーといった団体競技がそれぞれの地区予選を通過して本大会まで来ることができたためと考えられる。参加人数の減少が目立つのは、アラブ首長国連邦、アルジェリア、イラク、カタールである。

20の出場国のうち12カ国が東京2020でメダルを獲得した。公式ウェブサイトでは、金メダル数に次いで銀メダル数、さらにそれに次いで銅メダル数を並べてつけた順位と、メダルの合計数による順位が掲載されているが、金メダルを3ポイント、銀メダルを2ポイント、銅メダルを1ポイントと計算して、数値の高い順に並べたものが表2である。東京2020公式ウェブサイトでは金メダル数が1個上まわるためイランの方がトルコよりも上に位置づけられるが、全体的なパフォーマンスとしては、中東・北アフリカ諸国のなかではトルコが最も貢献していたとみるのが妥当だろう。

カタール選手団16名は7つの競技にエントリーし、男子重量挙げ、男子走高跳、男子ビーチバレーで4名がメダルを獲得し、メダル獲得の効率がとてもよい。重量挙げのファリス・アル＝バーフ (ELBAKH, Fares) はエジプト生まれ、走り高跳びで優勝したムウタズ・イーサー・バルシム (BARSHIM, Mutazz Eissa) はスーダン系ではあるがドーハの生まれ。リオ2016では、オリンピック選手団を構成するためにアフリカ生まれの有望な選手を帰化させたという印象を与えた湾岸アラブ諸国のなかで、カタールはポリシーをもってスポーツ振興を進めていることがうかがわれ、なるほど2022年のサッカーワールドカップ主催を予定し、2032年夏季オリンピック主催にも意欲を見せていることに納得がゆく。

中東・北アフリカ諸国がメダルを獲得した競技は、ウェイトリフティング、格闘技系(柔道、空手、テコンドー、レスリング、ボクシング)、射撃が多いが、チュニジアの17歳アフマド・アイユーブ・ハフナーウィー (HAFNAOUI, Ahmed) が競泳男子400m自由形で金メダルを獲得し、エジプトの21歳アフマド・ウサーマ・アル＝ジャンディー (ELGENDY, Ahmed) が近代5種で銀メダルに輝いたことなどは、北アフリカのスポーツの未来を開拓する快挙だったといえよう。また、イスラエルとトルコの選手が体操男子の個人種目でメダリストになったことも興味深い。

---

#### 筆者紹介

東京大学教養学部教養学科卒。1989～91年テヘラン大学文学部留学生。1998年東京大学大学院総合文化研究科より博士(学術)取得。1998年明治大学政治経済学部専任教員となり、2009年から専任教授。2019～20年オックスフォード大学中東センター、テヘラン大学世界研究科で在外研究。2003～2009年国際交流基金市民交流アドバイザーなど、複数の交流プロジェクトのモデレータ、ファシリテータをつとめる。2015～2021年日本中東学会理事。専門はイラン地域研究、文化論。

主要な編著書としては、『現代イランの社会と政治つながる人びとと国家の挑戦』(明石書店 2018年)。本稿の関連論文としては、「くなじ」をめぐる政治的対立—イラン女子サッカーチームのユニフォーム問題について」『スポーツ社会学研究』18巻2号(2010年) pp.53-66。「オリンピックとイスラーム世界—宗教とジェンダーの国際力学」高峰修編著『愛と欲望のオリンピック その多様な姿』(成文堂 2019年) pp.233-251. ほか。

---

表1 中東北アフリカからの参加選手数と獲得メダル数

国・地域	東京2020参加者数		リオ2016参加者数		東京2020メダル数		
	女子	男子	女子	男子	金	銀	銅
アフガニスタン	5		3		0	0	0
	1	4	1	2			
アラブ首長国連邦	5		13		0	0	0
	0	5	4	9			
アルジェリア	41		64		0	0	0
	13	28	11	53			
イエメン	5		3		0	0	0
	2	3	1	2			
イスラエル	89		47		2	0	2
	34	55	25	22			
イラク	3		23		0	0	0
	1	2	0	23			
イラン	65		63		3	2	2
	10	55	9	54			
エジプト	139		120		1	1	4
	48	91	37	83			
オマーン	5		4		0	0	0
	1	4	2	2			
カタール	16		38		2	0	1
	3	13	2	36			
クウェート	10		→独立参加選手団		0	0	1
	2	8					
サウジアラビア	33		11		0	1	0
	2	31	4	7			
シリア	6		7		0	0	1
	1	5	3	4			
チュニジア	63		61		1	1	0
	29	34	21	40			
トルコ	107		103		2	2	9
	50	57	48	55			

バーレーン	32		35		0	1	0
	7	25	14	21			
パレスティナ	5		6		0	0	0
	2	3	2	4			
モロッコ	46		49		1	0	0
	14	32	20	29			
ヨルダン	14		8		0	1	1
	4	10	1	7			
リビア	4		7		0	0	0
	1	3	1	6			
レバノン	6		9		0	0	0
	3	3	5	4			
難民選手団	29		10		0	0	0
	10	19	4	6			
独立参加選手団	(注2)		9		1	0	1

(筆者作成)

表2 メダル獲得でみるパフォーマンス (ポイント順)

	国・地域	メダル数			順位		
		金	銀	銅	公式ウェブサイト	合計別順位	ポイント計算
1	トルコ	2	2	9	35	20	19
2	イラン	3	2	2	27	33	15
3	エジプト	1	1	4	54	39	9
4	イスラエル	2	0	2	39	47	8
5	カタール	2	0	1	41	60	7
6	チュニジア	1	1	0	59	66	5
7	モロッコ	1	0	0	63	77	3
8	ヨルダン	0	1	1	74	66	3
9	サウジアラビア	0	1	0	77	77	2
10	バーレーン	0	1	0	77	77	2
11	クウェート	0	0	1	86	77	1
12	シリア	0	0	1	86	77	1

(筆者作成)

## ジェンダー

多様性と性差という点、昨今はLGBTQも含む問題提起や異議申し立てが議論の俎上にものぼるが、本稿では女性のオリンピック参加にしばって述べたい。

リオ2016と東京2020に（どちらか一方であっても）10名以上の選手団を送った中東・北アフリカの12カ国を、東京2020の参加女子選手が多い順に並べたのが、表3である<sup>4</sup>。モロッコ、バーレーン、アラブ首長国連邦、サウジアラビアを除く多くの国々で、女子選手数が増えていることがわかる。リオ2016のイスラエル選手団は女子の選手数が男子よりも多く、トルコ、モロッコ、バーレーンでも女子選手の比率が4割以上だったが、東京2020では女子がメダルを獲得した国の数が減り、女子選手が過半数の国はなくなり、4割以上もトルコとチュニジアの2国となってしまった。

中東・北アフリカの女子選手は、主として男子選手も得意なウェイトリフティング、格闘技系、射撃にエントリーし、それ以外も含めて総計23の競技に参加した<sup>5</sup>。予選で敗退し

表3 女子選手数とメダル

国・地域	2020東京大会			2016リオデジャネイロ大会		
	女子選手数	女子の比率(%)	女子のメダル	女子選手数	女子の比率(%)	女子のメダル
トルコ	50	47	☆☆☆☆☆	48	47	☆
エジプト	48	35	☆☆☆	37	30	☆☆
イスラエル	34	38	☆☆	25	53	☆
チュニジア	29	46		21	33	☆☆
モロッコ	14	30		20	40	
アルジェリア	13	32		10	15	
イラン	10	15		9	14	☆
バーレーン	7	22	☆	14	41	☆☆
ヨルダン	4	29		1	13	
カタール	3	18		2	5	
サウジアラビア	2	6		4	36	
イラク	1	33		0	0	
アラブ首長国連邦	0	0		4	31	

注：男女混合チームのメダルはここに含まれていない

(筆者作成)

- 4 10名以上の選手団にしばったのは、1名の多寡で男女の比率が大きく変わる例にフォーカスして誤解を招くことを避けるためである。なお、レバノン選手団はリオ2016では女子選手の方が1名多く（女子5名／男子4名）、東京2020では女子3名／男子3名で同数、東京2020のオマーン選手団も女子・男子同数（各2名）であった。
- 5 競技数をどう数えるかは、サイトによって異なるが、本稿では東京2020の公式ウェブサイトそれぞれのピクトグラムで紹介されている46競技として数えた。

て東京まで来られなかった競技もあったことを勘案すると、女性スポーツの裾野はかなり広がっているとみてよいだろう。

女性らしい体の線を強調する新体操やアーティスティックスイミング(リオ2016まではシンクロナイズドスイミングとよばれた)にも、中東・北アフリカから参加していることには目を見張らされる。イスラエルは、女子新体操リノイ・アシュラム選手が個人総合で優勝、団体も5位入賞と健闘。そしてリオ2016から連続して出場したエジプトのアーティスティックスイミング・チームも7位入賞、前回に続いて水泳大国のオーストラリア・チームよりも高い得点を得た。

東京2020では、さまざまな競技で新たに男女混合種目が設定され、射撃の男女混合種目にはイラン、エジプト、チュニジアのチームが、卓球の男女混合ダブルスにはエジプトのチームが、競泳400m 男女混合メドレーリレーにはイスラエル・チームが参加した。とりわけイスラエルの柔道団体3位と、トルコのアーチェリー男女混合チームの4位入賞は、この両国が男女共同参画に努力した成果といってもよいだろう。

選手のみではない、中東・北アフリカの女性審判の参加も注目すべきポイントであろう。エジプトのサーラー・ジャマール(ガマル)・アル=シャルヌービー(ELSHARNOUBY, Sara)は、アフリカおよびアラブ世界初のヒジャーブ姿の3x3バスケットボール審判として着目され<sup>6</sup>、7月25日・26日の3つの試合で笛を吹いた。ヒジャーブ/ヘッドスカーフ・ユニフォームの承認には複雑な経緯があり<sup>7</sup>、2017年までヒジャーブ・ユニフォームを公式に認めなかった国際バスケットボール連盟が彼女をオリンピック審判のリストに加えたのは画期的なことと思われる。また、日本の卓球混合ダブルスが大逆転をして強い印象を残した準決勝の審判員が、エジプトのイマーン・ファフミー(FAHMY, Eman)とイランのスィーミン・レザーイー(REZAEI DJAHDKON, Simin)という中東出身の女性であったことも特筆すべきであろう。さらにカナダの卓球審判員として参加したマルズィエ・ハキームアーラー(HAKIMARA, Marzieh)もイラン出身であると思われる<sup>8</sup>。

- 
- 6 彼女については、アル=ジャズィーラ、BBC、ABCなどの報道でもとりあげられた。  
<https://www.aljazeera.com/news/2021/4/26/first-arab-woman-basketball-referee-to-stand-tall-at-olympics>  
<https://www.bbc.com/sport/africa/57899407>  
<https://abcnews.go.com/Sports/hijab-wearing-basketball-referee-blaze-trail-tokyo-olympics/story?id=78742099>
- 7 山岸智子「オリンピックとイスラーム世界」高峰修編『愛と欲望のオリンピック』(成文堂 2020年) pp.247-249.
- 8 彼女が2009年(イラン暦1388年)にラシュトで開催されたイランの卓球女性選手権大会において40-50歳の部で準優勝をした記録がある。  
<https://www.irna.ir/news/9848041/>  
また、彼女が東京2020参加について記したブログは外国人参加者の記録として興味深い。  
<https://ttcanada.ca/journey-of-an-olympic-official-marzieh-hakimara-at-the-tokyo-olympic-games/>

ケニア生まれのマラソン女子イスラエル代表のサルピーターは、ずっと先頭集団にいたが、ゴールまであと4キロというところで立ち止まってしまい、なんとかフィニッシュしたものの66位に終わった。彼女は、生理痛で走り続けられなかったことをレース後明らかにし、これを口にするのは自分にとっても気分の良くないことだが、自然なことで隠す必要はない、と述べて忌避されがちな女子選手と生理の問題に一石を投じた。

ヒジャーブ・ユニフォームが公式に認められる趨勢のなかで、ヒジャーブをつけずに女子選手が試合に臨むことを可としようとする例も無視できない。柔道女子78kg超級でイスラエル選手と対峙したサウジアラビアのタハーニー・アル=カフターニー (ALQAHTANI, Tahani) は、イスラエル・ボイコットをせずに対戦したのみならず、ヒジャーブなしで頭髪を露出した姿で試合に臨んだ点でも衆目を驚かせた<sup>9</sup>。

## 人の移動

オリンピックが国籍を変えて競技を続けることは、中東・北アフリカに特徴的なことでも、新しい現象でもないし、国籍は変えなくとも生国の外に生活の場があることも珍しいことではない。とはいえ「グローバル化」として言及される現代の大勢の人の移動のありさまが中東・北アフリカのオリンピックにも反映されている、ということはできるだろう。

リオ2016から「難民選手団」が組織されるようになり、東京2020では29名が難民選手団として12の競技にエントリーした。その構成は、シリア出身者9名、イラン出身者5名、アフガニスタン出身者3名、イラク出身者1名、と中東出身者が過半数となっている<sup>10</sup>。難民選手団（競泳男子）のアラー・マースー (MASO, Alaa) がシリア選手団トライアスロン選手として参加した兄のムハンマド・マースー (MASO, Mohamad) とオリンピックの開会式で再会し抱き合った様子は感動的に報じられた<sup>11</sup>。また開会式で英国選手団の旗手をつとめたモハメド・スビヒー（ボート選手）は、父がモロッコ人で「英国で初めてムスリムが選手団の旗手となった」と報じられた。

難民選手団の選手たちが「難民」になった事情は、それぞれに異なることがインタビュー記事などからわかる。柔道男子67kg級のアクル・アル=ウバイディー (AL OBAIDI, Aker) が故郷モースル（イラク）を離れ、競泳女子のユスラー・マールディーニー

---

9 保坂はSNSで彼女を応援する声が少なくなかったと述べている。

[https://www.newsweekjapan.jp/hosaka/2021/08/vs\\_3.php](https://www.newsweekjapan.jp/hosaka/2021/08/vs_3.php)

10 それ以外は、南スーダン出身4名、エリトリア出身2名に加え、スーダン、カメルーン、コンゴ、コンゴ民主共和国、ベネズエラ出身から各1名で構成されている。

11 本稿の範囲外とはなるが、男子マラソン銀メダリストのナゲーエ選手と銅メダリストのアブディー選手が、それぞれにベルギー、オランダの代表として参加してはいてもソマリア出身で、最終スパートで励ましあってゴールした様子もまた、オリンピック最終日の感動的なシーンとして多くの人々の記憶に刻まれた。

(MARDINI, Yusra)<sup>12</sup>が故郷のアレッポ(シリア)を離れたのは戦禍によるものだが、自転車女子タイムトライアル個人に出場したマアスーマ・アリーザーダ(ALI ZADA, Masomah)は、アフガニスタンでは女性がサイクリングをすることが難しく、フランスに招かれて行った事情を語っている<sup>13</sup>。ケルマーンシャー(イラン)生まれのハームーン・デラフシープールは、妻をコーチとして空手(組手)をすることができないから2019年にカナダに移ったと、やはり出身国のジェンダー規範にあわないことを理由として国外に出ている<sup>14</sup>。

難民選手団は残念ながらメダル獲得はならなかったが、表彰台に最も近づいたのはテコンドー女子57kg級のキーミヤー・アリーザーデ(ALIZADEH ZENOORIN, Kimia)<sup>15</sup>だといえるだろう(3位決定戦でトルコのハティジェ=クブラ・イルグン(ILGUN, Hatice Kubra)選手に惜敗)。彼女はリオ2016でイランに女性初のメダルをもたらし、イラン内外でもてはやされた。筆者の見聞できた限りでは、彼女の故郷が戦火に見舞われたり、彼女の家族が政治的・宗教的に迫害されたりした様子はないが、彼女はドイツに難民として受け入れられ、新型コロナのために東京2020が延期された期間に難民選手の一員に入った<sup>16</sup>。初戦でイラン代表のナーヒード・キヤーニー=チャンデ(KIYANI CHANDEH, Nahid)選手と対戦したが、二人はイランでは親しかったとのことで、感慨深い対戦になったことと思われる。

テヘラン生まれの柔道家サイド・モッラーイー(MOLLAEI, Saeid)がモンゴル代表として男子81kg級銀メダルを獲得したことに仰天したのは私だけではないだろう。2019年の世界柔道選手権大会でイスラエルの選手との対戦を避けよとの本国からの命を受けて敗退した彼は、「日本武道館のタタミに再度立ちたい」との強い思いを胸にイランを離れ、難民選手団の候補となり、その後モンゴルの国籍を取得したのである<sup>17</sup>。

---

12 マールディーニーは、リオ2016にも出場し、国際難民高等弁務官事務所の親善大使もつとめて、「難民」として生きる姿をアピールしてきた。

13 <https://olympics.com/en/featured-news/masomah-ali-zada-cyclist-olympian-refugee>  
なお、女性が自転車に乗ることの是非は議論の分かれるところで、禁止理由についてもさまざまである。ヨーロッパ在住のイスラーム法学者には、女性がラクダに乗ることが禁忌でないことを論拠に、女性のサイクリングは問題ではないとする者もいる。

14 <https://olympics.com/en/featured-news/hamoon-derafshipour-tokyo-bound-leaving-iran-canada-wife-coach>

ちなみに彼の妻サミーラー・マーレキプールはアジア選手権でイラン代表として銅メダル獲得し、2017年に選手を引退している。

15 東京2020の公式ウェブサイトではALIZADEH ZENOORINというファミリーネームになっているが、Alizadeh-Zenuziに近い形のラテン語表記をすべきだろう。

16 アリーザーデは自身を「何百万もの抑圧されているイラン女性の一人」として亡命後に政権批判をしている。国外の練習で男子と一緒にヒジャブなしで練習している姿がSNSに投稿されイランで取りざたされたことが、亡命の動機の一つだとも考えられるが、昨今のイランで広くみられる「国外脱出の夢」を叶え、「より良い生活環境を求めて移住したアスリート」と筆者にはみえる。

17 <https://www.dw.com/en/judoka-saeid-mollaei-tokyo-a-place-of-destiny/a-58663427>



## むすびにかえて

オリンピックは「平和の祭典」と言われる。従来の政治対立をいったん脇において、柔道女子でサウジアラビアとイスラエルの選手が、そしてイランとアメリカの男子バスケットボールチームが、オリンピックのルールに則ってフェアに試合を行えたことはその好例とみることができるかもしれない。他方で、軍属であるイラン革命防衛隊のジャヴァード・フォルギー（FOROUGHI, Javad）やイスラエル国防軍のアビシャグ・セムベルグがメダリストになり、それに対してさまざまなコメントが出ている。

本稿では限られた参加者にしか言及できず、パラリンピアンもとりあげられないが、中東出身のアスリートがたくみに「難民」枠に入り、イスラエル・ボイコットについても相異なる対応やそれを乗り越える方策がみられた。女子選手の比率がはかばかしく上がりはせず、とはいえトルコ、エジプト、イスラエルでは女子選手が著しい活躍を見せ、イスラーム法を厳格に適用していると思われるサウジアラビアの女子選手がヒジャーブなしで試合に臨む、という複雑な様相がみてとれる。こうした既存の枠では説明しがたい状況は、中東の「液状化」と結びつけて評したくなるが、今やオリンピックという巨大イベントが、ジェンダー問題の潮流、多様性とナショナリズムの危うい関係、経済的インセンティブと損益の難しい計算などを投影した、人間の肉体によるドラマの集積となっていると考えれば、中東・北アフリカからの参加者たちもそうした現代世界のありさまを示してくれたのだと思えるのではないだろうか。

\*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。